

ゆめかな

天城町立岡前小学校 二年

宮田 みやた

和奈 あいな

「わあ、おちちやう。」

一しゅん目の前がくらくなくなった。

あれれ、一体何がおきたのだろう。気がつく、わたしは大きなはっぱの下にすわっていた。「ここはどこかな」とあたりを見回すと、何だか見おぼえのある大きなとびらの前だった。「こんなに大きなとびら、どうやって入るのだろう。きょ人でもなければあけられないよ」と思っで見ていると、せ中にしせんをかんじた。ふりむくと、わたしと同じくらいの大きなみどり色のカエルだった。思わずわたしは、

「わあ、こわい。食べないで。」

ときけんだ。するとカエルはクスクスわらい出した。何だかそのわらい声でこわいという気もちがきえた。それからカエルは、

「ぼくのこと、おぼえてる。」

ときいた。わたしはきょんとんとしていると、つづけて、「きのうの夕方、とてもつよい風がふき、そのせいで大きな木のえだがおれてとんできたの。その木のえだに

ぼくは、つぶされそうになったところをきみにたすけてもらったんだ。」

と言った。

「え、わたしそんなに大きな木もカエルも知らないよ。」と言うと、カエルはまたわらった。そして、こう言った。

「今日は、ぼくのせかいへきみをしようたいするために、小さくなってもらったんだよ。」

わたしは、びっくりしてまわりを見ると、見おぼえのある大きなとびらは、わたしの家のげんかんのドアだった。おどろいているとカエルはわたしの手を取り、せ中にのせた。そして、ひとつとび。どこかの森のようだ。すこしすすむと大きなガジュマルの木があり、そのわきにさらさらとながれる川があった。

「すっかりとつかまってね。」

とカエルが言う、ピヨーンと川へとびこんだ。目をしているとカエルが、

「とうちやくしたよ」

と言った。

目をあけるとそこは、見たことのないけしきがあった。大きなじゅうたんみたいなのはっぱがあちらこちらに生えている。その下には、すてきなおへやがいくつもならんでいた。わたしは、リビングみたいなどころにあんないされた。そこには、大きなテーブルといす、その上に

は、おいしそうなおりよりやデザートがたくさんならんでいた。いっしょにおりよりを食べておなかいっぱいになったわたしを、ほかのおへやにあんないしてくれた。そこには、ブランコやシーソー、トランポリン、プールのへや、たくさんの本がならぶ図書かんみたいなへやにゆらゆらゆれるハンモックもあった。時間をわすれるくらいに楽しんだわたしは、

「そろそろ、かえるね。」

と言った。カエルは少しさみしそうに、こくりとうなずき、わたしをせ中にのせてプールの中へピヨーンととびこんだ。

まぶしくて目をあけると家の前に立っていた。足もとにはみどり色の小さなカエルがちよこんとすわっていた。わたしを一ど見上げて、ピヨーンとどこかへ。大声で、

「楽しかった。ありがとう。」

とさけんで目がさめた。

わたしは、ベッドの上にいた。何だったのかな。